

地域資源活用ネットワーク形成支援事業

「地域ストーリー」

「劇的な旅・富良野2015秋」

◆脚本・演出・・・富島カツシゲ

◆共演者

久保隆徳(富良野GROUP)
森上千絵(富良野GROUP)
水津 聡(富良野GROUP)
東誠一郎(富良野GROUP)
大山茂樹(富良野GROUP)
石川慶太(富良野GROUP)
松本りき(富良野GROUP)
栗栖綾濃(富良野GROUP)
久保明子(富良野GROUP)
富由美子(富良野GROUP)
黨 清信(富良野GROUP)
福島カツシゲ(EMA)

多田繁夫(多田農園)

加藤公之・かおり(エゾアムプリン製造所)

黒木健太郎・夏実(黒木農園)

亀淵雅彦(ふらのワイン工場)

小林英樹・ゆりえ(ホテル・ナトゥールヴァルト富良野)

富良野弥栄太鼓保存会

ゴスペルサークル「スノーサウンズ」

◆スタッフ

プロデュース・・・松木政治(富良野市商工観光係長)

総合演出・・・太田竜介(富良野演劇工場長)

アートディレクター・・・吉澤正美(株式会社トラップ)

WEBマーケット・・・須田拓磨(WEBデザイナー)

撮影・・・星野麻美(フリーカメラマン)

AD・・・櫻庭真彩(富良野市商工観光課)

照明・・・広瀬利勝(富良野GROUP)

音響・・・三浦淳一(富良野GROUP)

映像編集・・・樋口一樹(富良野演劇工場)

制作・・・ふらの観光協会

NPO法人ふらの演劇工房

協力・・・フラノ・クリエイティブ・シンジケート

富良野自然塾

富良野の秋。

10月4日(土) 13:00。

富良野駅に集まった参加者たち。

どこへ行くのか？何を体験するのか？

全く知らされないまま集まった参加者は、不安な表情を覗かせながらも、貸切バスに乗り込む。

今回の企画タイトルは「劇的な旅」

「演劇鑑賞？旅？……いえ、両方です」

「演劇によるまちづくり」を行っている富良野が、演劇的な仕掛けで観光客を楽しませる

「演劇×旅Ⅱエンタビ」を提案。

「富良野の自然を舞台に、参加者も移動しながらの1泊2日の壮大な野外劇が始まるのです！」

◆1日目

バスの中で旅のご案内をするのはキャビンアテンダント風バスガイドの3人。実は富良野塾OBの女優たち。旅の注意事項を面白おかしくジェスチャーを交えながら話し、初対面の参加者たちの緊張をほぐします。

旅の行程は

「ガイドブックに載っている有名な観光スポットでは無く、住んでいる私たちがオススメする、マニアックな場所へお連れ致します！」と宣言。

バスは市街地からどんどん離れていく。

出発から30分。到着した場所は、中富良野岳の麓、ベベルイにある

「原始の泉」。

ここで皆さんをお迎えするのは、「空の峰」で喫茶店を営んでいるという浦河幸恵さん。実はこの方も富良野塾OBの女優、森上千絵さんです。

毎日「原始の泉」にコーヒー用の「水」を汲みに来ているという幸恵さんの案内で、熊よけの鈴を参加者が鳴らすと、突然大きな太鼓の音が森に響きます。

富良野の和太鼓集団、

「富良野弥栄太鼓」による『鬼・博動』の演奏。

旅のオープンニングとしてツアー参加者を歓迎する曲を演奏してくれます。参加者もびっくり！森にこだまする見事な演奏に心も震えます。

太鼓の演奏が終わると、幸恵さんから参加者にボトルが渡され、6000年もの間、枯れずに湧き続ける「湧水」をそれぞれがボトルに汲み、喉と手を清めたら、準備OK。

準備体操をして、ここから試練の道のりが始まります。

「原始の泉」から続く、長い直線。

富良野の秋の空と空気、広がる田園風景を感じながら

「フットパス」。

「フットパス」とは、「森林や田園地帯、古い町並みなど、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと」。

どこまでも続いていそうな道は、ゴールの見えない人生と同じ。自分の足でゆつくりと歩き、都会の喧騒で慌ただしく生活する日常から離れた中で、風景や草木を観察すると、普段なら見過ごしてしまう生命の息吹を感じることが出来ます。

きつい上り坂を上りきると、ガイドが温かい富良野のコーンスープを用意してお待ちしています。畑の真ん中で、ちよつと一息。

しかし、まだまだ道のりは続きます。

歩くこと約1時間。

着いたのは、五年前に閉塾した

「富良野塾」跡地。

管理をしている富良野塾OBの東誠一郎さんの案内で、二年間の共同生活をしながら「夢」を追い続けた、卒塾生375人の若者たちのドラマを感じます。

最後に、富良野塾の稽古場として使われていた「スタジオ棟」に入ると、そこには一人の男性が。

富良野塾OBの水津聡さんが、新富良野プリンスホテル敷地内にあるクラフト・ショップ「ニングルテラス」にあるお店「森の楽団」の人形作家、高木誠さんになりきり、一人芝居が始まります。

「二〇年前、富良野塾生だった僕は、塾の近くにある小中学生たちのクリスマスプレゼントに、拾ってきた木を使った「木人形」をプレゼントしたんです。お金が無かったですからね・・・それをたまたま見た倉本先生から、今度「ニングルテラス」というクラフトショップを作るから、木人形を三か月で一〇〇〇体作りなさいって(笑)・・・それから、始まったんです。何で二〇年も続けられたんでしょうね？分からないんですけど・・・買って下さる方の笑顔を見ているうちに、いつの間にか楽しくなってきましたよね」

拾ってきた流木に命を吹き込み、見事な人形を作る高木さんの半生を、師匠である倉本聰氏から受けた「知識より知恵を」。「作るのではなく創る」という教えを交えながら、語ります。

参加者は、この地で、何もないところから生み出す知恵と、エネルギーを感じるのです。

「拾ってきたモノ」を「芸術」に変える。

物で溢れた現代の消費社会に、疑問を感じる機会になります。

「スタジオ棟」を出ると、草の茂った中庭に石碑が。

石碑には、1984年に富良野塾を開設した際に倉本氏が書いた「起草文」が記されています。

あなたは文明に麻痺していませんか

石油と水はどっちが大事ですか

車と足はどっちが大事ですか

知識と知恵はどっちが大事ですか

批評と創造はどっちが大事ですか

理屈と行動はどっちが大事ですか

あなたは感動を忘れていませんか

あなたは結局何のかのと云いながら

わが世の春を謳歌していませんか

湧水だけを持ち、自分の足でここにたどり着いた参加者にとって、それらの言葉は、深く胸に刺さり、参加者の「価値観」を揺さぶります。

富良野塾跡地を出発すると、果てしなく農地が広がる絶景ポイントがあります。バスから降り、風景を写真に収め、農作業をしていた農家さんと一緒に記念撮影。

「カシャッ！」シャッター音が鳴ると、突然農家さんたちが歌い出します。

実は、農家さんのフリをしたゴスペル・サークル「スノー・サウンズ」のメンバーだったのです。

素晴らしい「OH HAPPY DAY」の歌声は、参加者の旅の祝福するかのようになり、胸に響きます。

「感動」は「驚き」から生まれる。

演劇的な演出で、参加者の心を揺さぶります。

スノーサウンズの皆さんに見送られながら出発。

次の目的地は上富良野町にある

「多田農園」。

生産から加工・販売、またファームカフェやペンションまでの安心・安全の6次産業を目指しているというオーナーの多田代表から、富良野地域の農業のについて学び、普段何気なく食べている「食物」の有難さを感じます。

「洋ナシ」をそれぞれがもいで、ミキサーにかけると、果汁100パーセントのジュースが完成。湧水しか与えられてなかった参加者にとって、味わったことの無い至福の味が口の中に広がります。

帰りがけには、多田オーナーからプレゼントが。

今夜の夕食用の食材として、ジャガイモ、ニンジン、玉ねぎを頂きました。

多田さんの「おもてなし」に、みんなで感謝の気持ちを伝えて、お別れです。

「また、多田さんに会いたい」。そんな気持ちにさせてくれる出会いでした。

富良野の町に戻り、到着したのは

「ホテル ナトゥールヴァルト富良野」

疲れた体を癒してくれる「露天風呂」に入り、しばし、くつろいで頂きます。

くつろいだ後はお待ちかねの夕食。

コメディアンの福島カツシゲさん演じる中国人料理長「劉さん」と俳優、石川慶太さんが演じるホール・チーフが登場。

劉さん「では、料理の説明をするよ。まず、前菜だけ・・・ホントにいい奥さんでした」

石川「劉さん・・・」

劉さん「劉さんに甲斐性がなかったので、愛想をつかされましたが、とても優しい奥さんでした」

石川「劉さん、何お話をしてるの？」

劉さん「前妻、別れた女房のことね」

石川「その前妻じゃなくて、オードブルのことね」

と、絶妙の掛け合いで、今夜のメニューを紹介してくれます。

「食」は「人」を「良く」するもの。

エンターテイメントな食Ⅱ「エンタベ」で、富良野の食材を使った、このツアーだけのためのフルコースを堪能しながら、宴は2次会まで続きました。

◆2日目 10月5日(日)

朝7時。朝食を取らずにロビーに集合して、

「北の峰ゴンドラ」へ。

そこで渡されたのはトランシーバー。

「何故？」

グループに分かれてロープウェイに乗り込むと、トランシーバーから歌声が！

「新しい朝が来た 希望の朝だ 喜びに胸を開け 青空仰げ ラジオの声に
健やかな胸を この薫風に開けよ それ1、2、3♪」と、どこかで聞いたこと
のある声がある。

参加者たちだけのために流れる「ゴンドラ・トランシーバー・ラジオ」のDJは、
キタノとアシスタントのミネ。これ、合わせて「北の峰」です(笑)。

ロープウェイに乗った参加者と掛け合いながら進行するラジオ番組が始まって5
分ほどたつと、山の中腹で手を振るDJの二人を発見！

福島カツシゲさんと女優、栗栖綾濃さん。

何と、ラジオはここから発信されていたのです。

「いつも、つながっている」

山頂までの約10分間の番組では、富良野のオスメグルメや人気のお土産などが紹介され、昨年亡くなられた「ファーム富田」の富田会長の感動秘話なども、参加者の心を揺さぶります。

「北の峰山頂」へ到着。

山頂には、専用のイスとテーブルが用意され、雲間に広がる「富良野盆地」の景色が広がります。

そこでは、昨日、「原始の泉」で出会った幸恵さんが待っていてくれ、「ここが私の喫茶店、『空の峰』よと言って、温かい富良野野菜とベーコンのスープを振る舞ってくれました。寒い体を温めてくれるスープと心遣いに、参加者の心も温まります。

山頂から降りるロープウェイでも再びラジオが。ここで、これからの予定が発表されます。

何と、この後は参加者それぞれが、自分の行き先を決めるのです！

- ①「エンアムプリン」と「黒木農園のミニトマト」
- ②「ぶどうの収穫体験」と「至福のワイン三昧」
- ③「自分で勝手に行動するからほっといてくれ」

3つのコースが用意され、ホテルで朝食を食べながら、それぞれが自分の目的地を選択します。

皆さん、かなり悩まれていましたが、③の「ほっといってくれ」はご愛嬌。さすがにいませんでした。

朝食が終わると、自分の決めたコースのバスに乗り込み、いざ、出発。

①のコース

選んだ参加者たちは、東山地区の田園地帯にポツンと佇む、みのむしをイメージしたという

「エゾアムプリン製造所」に到着。

「みのむし」をイメージして建てられた製造所で迎えてくれたのは、7年前に東京から移住してきたオーナーの加藤さんご夫妻。

直径20cm、厚さ6cm。重さ1kgのプリンは、その日の朝に搾った牛乳を使い、卵は日本で唯一の純国産鶏が産んだ卵です。その他の材料も全て道産で、100パーセント手作り。1日18個しか作れないので、注文は数カ月先まで埋まっているそうです。そんなレアなプリンをみんなで分け合って食べました。

加藤さんご夫婦のこだわりと、自然に対する愛情がたっぷりと込められたプリンの味に、全員、笑顔が溢れています。

「コレは地元に戻ったら、必ず注文します！何カ月でも待ちます！」と参加者。そこから、布礼別にある

「黒木農園」へ。

富良野塾のOBである黒木健太郎さんが、二〇一一年にミニトマト農家として就農した農園です。

役者を諦めて農業を始めた理由や、奥様との出会いのエピソードなど、一人の人間のドラマは、人生のいろいろな「カタチ」と「可能性」を感じさせます。

化学肥料や農薬に頼らず、有機栽培で育てた「プチプロ」は、果物かと思うような甘さが口に広がり、参加者の手が止まりません。

7種類のトマトを味比べ、トマトそれぞれの個性に、参加者の好みもバラバラで、会話が弾みます。奥様の名前「夏実」から命名した「トマトジュース」を頂いて、トマトのフルコースが終了。トマトもジュースももっと欲しい方には奥様が自ら販売。

生産者と触れ合いながら、極上の味をめぐる時間は、あっという間に過ぎて行きます。

②のコース

選んだ参加者は、清水山に広がる

「ぶどう畑」へ。

ワイン工場の亀淵所長が待っていてくれます。

どのぶどうからどんなワインが作られるのかをレクチャーしてもらった後は、みんなでぶどうを収穫！コンテナ20個分の収穫は大変ですが、富良野塾OBの石川慶太さんがトークで盛り上げてくれます。

朝の曇り空から一転、温かい日差しが広がってきて、少し汗をかきましたが、みんなで力を合わせて無事完走。

お仕事をした後には、もちろんご褒美が！絶景ポイントにテーブルとワインが用意されています。中には最高級のワインも用意されていて、ぶどうの香りと太陽に包まれながらの「至福の一杯」で乾杯。

参加者が収穫したぶどうは、ワイン工場へ。

ワインが作られていく過程を見ながら、途中ではなんと、発酵途中の「ベビーワイン」を飲ませて頂きました。微炭酸の味はスッキリとしていて飲みやすく、レアな体験に。

物づくりの大変さを、体験しながら学び、

学んだからこそ味わえる、「食の喜び」。

そして、共に汗をかきながら目標を達成する「連帯感」。

また少し、つながりが深くなっていきます。

①②のそれぞれのコースが終わると、最終目的地である

「富良野演劇工場」に集合。

2000年にオープンしたこの劇場は、倉本聰氏が設計から関わり、富良野塾（現・富良野GRoup）のフランチャイズ劇場として、全国から多くの観客が訪れる場所です。

参加者たちが、誰もいない客席に座ると、突然、照明が落ちて真っ暗闇に！

音楽が流れ出し、ゆっくりと舞台の幕が上がります。

富良野塾OBらによって、このツアーのために創られた

「プレミアムシアター」が開演。

「人形振り」というパントマイムでオープニング。

続いて、若い女性「ダレカ」が、周囲の景色や人々に気付かず走り続けているシーンが演じられます。

「ダレカ」は、皆さん自身のこと。

「あなたは、都会のどこかで走り疲れていませんか？」

言葉を投げかけられた「ダレカ」が

富良野の四季の移ろいの中で、様々な風景や食物と出会いながら、自分の人生を投影させていきます。

「季節がめぐるように、人生もまためぐります。……アツという間なのです。人生はアツという間なのです。アツという間の連続です。ならば、そのアツという間をどう過ごすかなのです。アツという間だから、走るのではなく、ゆっくりと歩きますか？歩いていると見えてくる風景があるのです。そんな風景を楽しんでみませんか？」

「ダレカ」は、富良野の地で、ゆっくりと歩くことと、少し立ち止まってみることを学びます。

続いて、一一〇年前の富良野開拓民として老夫婦が登場し、富良野の歴史と私たちの人生を照らし合わせながら、北の峰山頂から町を見下ろしながら、語ります。

「あのころは、ガムシヤラに働いたりしました。一一〇年が経って、今のような町が出来るなんて、想像もしていませんでした……。今の世の中はどうですか？豊かに暮らしちりますか？……この町、この故郷を、そして地球を、皆さんどうぞ宜しく願います」

最後は、二日間の旅の映像が、音楽に載せてスクリーンに流れ出します。ドキュメンタリー映画のようなこの作品は、

「旅の主役は、あなた。そして、富良野で出会った全ての人が共演者です」

とのメッセージが込められ、観客は涙します。

映像が終わり、明るくなると、

カーテンコール。

ここで、二日間の仕掛けの全てが明らかになります。

富良野市民だと思つてた人たちが、実はプロの俳優だったと知り、参加者は驚きと感動を隠せません。

旅の共演者たちから参加者に感謝の言葉が述べられ、幕が閉じられます。

ロビーに出ると、①と②のコースそれぞれから持つて来たお土産が用意されています。

「おすそわけ」。

どちらのコースを選んでも、全てを味わうことが出来るという「おもてなし」にそれぞれの体験話を話しながら、お別れの時間が近づいてきます。

最後に、

参加者だけの「ガイドブック」が手渡されます。

二日間の旅の行程や、それぞれの場所の詳細が記されていて、全てが「劇的」に仕掛けられた「ドラマ」のパンフレットになっていて旅の思い出を記録としてお持ち帰り頂きます。

劇場を出て、富良野駅に向かう途中、バスの窓から見たのは、畑の水平線から綺麗な弧を描いた美しい「虹」。

すべてが作られた「演劇」では無く、最後は「自然」がサプライズの演出を施してくれ、23時間の壮大な野外劇「劇的な旅」の幕が、閉じました。

おしまい。